

中世英文学に映し出された 古代ギリシア文化

松 下 知 紀*

0. はじめに

文明は一枚の布のように歴史の時間という縦糸に隣接諸国からの様々な影響という横糸によって織り上げられてきた。地中海に面するエジプト、ギリシア、イタリアなどの国々は、異なる文化を背景に持ち、互いに拮抗しながら影響を与えあう状況が続けてきた。

本稿は、中世英文学に映し出された古代ギリシア文化がどのようなものかを、ミケーネ、スパルタ、デルフィ、アルゴスなど古代ギリシア世界の遺跡を訪れてその概要を示す。また、ホメロスの『イリアス』に登場するギリシア軍側のアガメムノン、メネラウス、アキレウス、ディオメーデなどについて触れる。また、ギリシア神話の世界について述べる。最後に、古代ギリシア文化がラテン文学、イタリア・ルネッサンス文学を経て中世英文学にどのように伝えられたかを検討する。

I. 古代ギリシア

古代ギリシアは、オリーブなどが自生する温暖な気候に恵まれ、古代か

*専修大学文学部教授

ら航海可能な距離にある国々が、異なる文化をもち、異なる食糧を交換することができた。古代ギリシアは小さな国家の集合体でありながら、充実した高度な文化を築いていた。ブローデルは、地中海の歴史的基盤を次のように述べている。

歴史の基盤としての狭い海

地中海はひとつの海ではなくて、まずまず広い峡路によって互いにつながっている海原の連続である。こうして、大陸の塊のさまざまな突き出た部分の間にある地中海の西と東の二つの大きな海盆において、一連の狭い海、つまり一連の海峡（narrow-seas）は個性を持っている。こうした世界のそれぞれは、それぞれの特徴、船の形式、習慣、固有の歴史法則を持っている。また一般に、最も狭い世界は、最も豊かな歴史的意味と価値がある。（ブローデル『地中海Ⅱ』173頁）

ボナール（1989, 1: 20-22）によれば、ギリシア民族は紀元前二千年から千五百年のあいだにエーゲ海沿岸に侵入し、はじめはエーゲ海民族の権威と支配を受け入れたが、のちに反乱をおこし、千四百年ごろ、ついにクノッソスの宮殿を焼き滅ぼした。さらに、ギリシア民族はエーゲ民族の神々や神話を受け継ぎながらも、独自の道を歩み始めた。多数のギリシア民族はダーダネルス海峡に近いトロイアに遠征し勝利した。トロイア城は、紀元前十二世紀初頭（紀元前1180年ごろ）長期にわたる包囲のあと攻略され焼き払われたが、ギリシア詩人ホメロスは『イリアス』にトロイア戦争の挿話を構成している。

ギリシアには古代ギリシアの繁栄を反映する紀元前の世界遺産が多く残されている。これらの世界遺産は、古代ギリシアの威容を示すとともに、古代ギリシア国家の存在とギリシアのアポロン等の多神教の存在を確認す

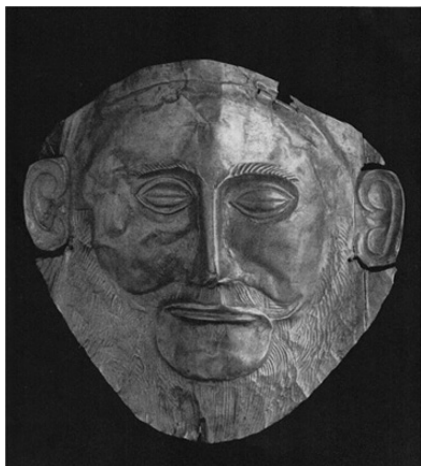
るうえで重要である。

アテネのアクロポリス（パルテノン神殿、エレクトيون神殿、アテナ・ニケ神殿、ディオニュソス劇場、アクロポリス博物館、ヘロデス・アティコス音楽堂、ミトロポリオス大聖堂、古代アゴラ博物館）、デルフィ古代遺跡（アポロン神殿、競技場、デルフィ博物館、カスターアの泉、アテナの聖域、トロス（大地母神ガイアを記念））、オリンピア古代遺跡（ゼウス神殿、ヘラ神殿、オリンピア博物館）、エピダウロス古代遺跡（野外劇場、アスクピオスの神殿、トロス（円堂））、ダフニ（ダフニ修道院）、オシオス（オシオス・ルカス修道院）、ヒオス島のネア・モニなどの修道院群、ミストラ遺跡、パッセのアポロン・エピクリオス神殿、テサロニキ（ロトンダ（聖ゲオルギオス教会）4世紀円形霊廟、霊廟と洗礼堂の宗教的初期キリスト教建築、8人の聖巡礼者）、ヴェルギナ古代遺跡、ミケーネとティリンス古代遺跡、パトモス島の聖ヨハネ修道院、ディロス島（アポロン神殿、ライオン像）

I.1 ミケーネとアガメムノン

ミケーネは、ギリシア・ペロポネス半島北東部のアルゴリス地方にあるミケーネ文明の重要遺跡である。円形墓域の5基の竪穴墓から黄金の仮面を始め、大量の黄金製品と青銅刀剣等の副葬品が出土した。

ミケーネ王アガメムノンは、弟王メネラオス（スパルタ王）が美貌の王妃ヘレネをトロイア皇子パリスに誘拐されたため、ギリシア遠征艦隊の総大将として出港し、トロイアを陥落した。



画像 黄金のマスク（ミケーネ遺跡・円形墓地出土）アテネ国立考古学博物館
『エーゲ海とギリシア・アルカイック』3-92



画像 ミケーネ遺跡・獅子の門



画像 ミケーネ遺跡全景

I.2 スパルタとメネラオス

スパルタ王メネラオスは絶世の美女と謳われた王妃ヘレネをトロイア国の皇子パリスに誘拐される。トロイア落城の際、巨大な木馬に潜んで城内に入る。ヘレネを連れ戻して、幸福な日々を送り、西方の楽園エリュシオンの野に赴いた。



画像 古代スパルタ国王・レオニダス（紀元前480年）スパルタ考古学博物館
Enciclopedia dell'Arte Antica IV : 569



画像 スパルタ遺跡

I.3 アルゴスとディオメーデ

アルゴリスはギリシア・ペロポネス半島北東部に位置し、ミケーネ時代には政治・文化の先進地帯として栄えた。その最も有力な都市国家だったアルゴスは、強国スパルタと敵対しつつ、ペロポネス半島の主要な拠点となった。



画像 アルゴス・要塞ラリッサ城址



画像 アルゴス・古代劇場

ディオメデスはチョーサーの『トロイルスとクリセイデ』に登場するギリシア軍の騎士であり、トロイルスからクリセイデを奪い取る剛腕を振るう。ボナール（1989，Ⅰ：49-51）によれば、ディオメデスが大胆で血気にみち、情熱家だった、と次のように述べている。

ディオメデスは若い大胆さと血気にみち、燃える胸をもつ。……彼の若さは年長者にたいしてもおそれを知らない。……ディオメデスはいつでも進む覚悟のできている戦士であり、志願兵の心をもっている。激戦の一日が暮れてから、トロイア方の陣に危険な夜間偵察に行くことを志願するのも彼である。彼は義務以上の働きをすることを好む。一種の陶酔が彼を戦闘の最前線へとみちびく。

ディオメデスは明るい情熱家、熱血漢である。……ひとりの女神がディオメデスと友情で結ばれている。好戦的だが聡明なアテナが彼にのりうつり、彼の心と彼女は一つとなる。彼女は彼の戦車に乗りこみ、彼の隣に立つ。彼女が彼を合戦のまっただなかに投げこみ、彼女が彼に力と勇気を満ちあふれさす。

I.4 パルテノン神殿とオリンポス神ペリクレス



画像 アテネ・パルテノン神殿遺跡

オリンポス神ペリクレスについて、ボナール（1989，Ⅰ：279-81；297）は次のように述べている。

ペリクレスは 前461年に政権についた。..... ペリクレスはアテナイの民主制を完成する。..... 彼はアテナイ市をギリシア世界の活動的な輝かしい中心地にすることを望んだ。..... アテナイの造形美術の卓越が、ギリシア民族すべての心に燃える生への愛着を表現し得ると信じていたのである。

第二次ペルシア戦役で破壊された神殿の再建に同盟の基金を使うことをアテナイに認める政令が、前450-449年にペリクレスによって提案され可決された。..... アクロポリスの四つの主な建物（パルテノン、プロピュライア、エレクトイオン、勝利のアテナ（アテナ・ニケ）神殿）は、その内外の彫刻ももちろん、アテナイの建築と彫刻の最盛期に属する。